

たまねぎ直播栽培の雑草管理

たまねぎは、野菜類のなかで輸入量が最も多く、“国産”の生産拡大が望まれている品目のひとつです。しかし、生産を拡大するには、作業の省力化や、生産コストの低減が課題となっています。全農 農産物商品開発室では、農研機構と連携し、省力・低コスト化に向けたたまねぎ直播栽培技術の開発を進めています。この技術で特に重要なのは播種適期と雑草管理ですが、今回は雑草管理について紹介します。

たまねぎ直播栽培で使える除草剤

たまねぎの直播栽培で使える除草剤は、移植栽培よりも数が限られているため、各剤の特性をよく理解したうえで体系的に処理する必要があります。特に、播種直後～冬季までは、たまねぎの生育が雑草に負けやすいので、雑草を発生させないための管理が必要です。播種直後に使用できる除草剤としては土壌処理剤が2剤（シアナジン水和剤、ペンディメタリン乳剤）あります。これら2剤をプランターで試験したところ、両剤とも約1ヵ月間、雑草の発生を抑えることができ、また、「ペンディメタリン乳剤」は「シアナジン水和剤」



写真1 中耕により小さな雑草は除去することが可能

よりも10日ほど抑草期間が長いことがわかりました（図1）。なお、実栽培圃場では、周りからの雑草種子の飛散やさまざまな環境要因があるため、抑草期間はこれよりも短くなることに注意が必要です。

除草剤を使うときの注意点

除草剤は、使い方によってはたまねぎにも影響をおよぼすおそれがあります。特に、高温や大雨が予測される条件では薬害を助長する可能性が高いため、使用は避けましょう。また、砂土などの水はけのよい土壌で

の使用も薬害のおそれがあるため、ラベルの注意事項に従うことが重要です。

中耕と組み合わせる

前述したように、直播栽培で使用できる除草剤は限られているため、中耕と組み合わせた雑草管理が必要です（写真1）。特に、除草剤の効果が切れ、雑草が生え始めた時期に実施してください。なお、中耕は、除草剤の処理層を破壊してしまうため、実施後に除草剤を散布するのがポイントです。

除草体系の確立に向けて

直播栽培の雑草管理で特に重要な時期は「播種前の圃場準備期間」「播種後冬季まで」「春先」であり、除草剤と中耕による体系処理が重要です。最適な体系は地域や土性、播種時期によって異なるため、全農では、引き続き除草体系の確立に向け、事例を収集していきます。

【全農 耕種総合対策部 営農・技術センター
農産物商品開発室】

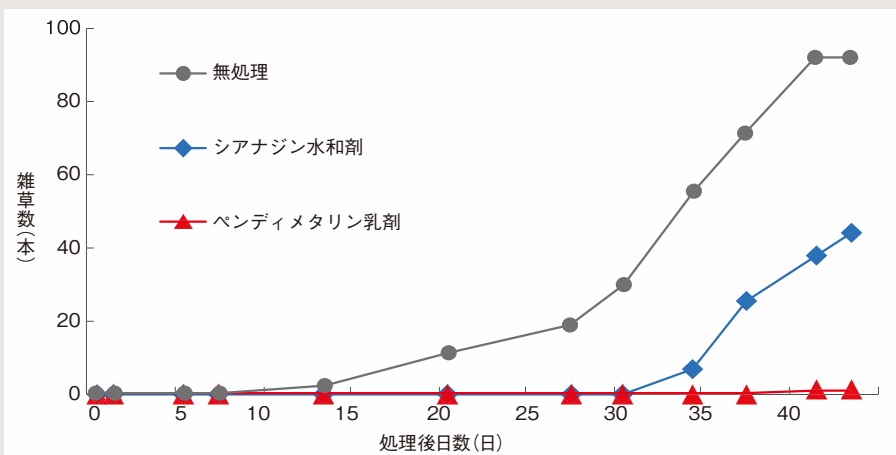


図1 土壌処理剤の除草効果